

# 地方都市の救急病院に勤務して

熊本赤十字病院 北田 英貴（熊本県）

私は、昭和六十年に自治医科大学を卒業して九年間の義務年限を終了後に、熊本赤十字病院に勤務しています。熊本赤十字病院は、人口約六十七万人の熊本市の東部に位置し、救命救急センターを併せ持ち熊本県における救急医療の拠点となっています。年間約五万人の救急患者と約五千台の救急車を受け入れています。また、熊本県の基幹災害医療センターとして、地域の災害拠点病院及び公的病院を対象とした災害対応時の各種研修や大量傷病者受け入れ訓練の指導を行っています。国際的な医療救護も行っており、ハイチ大地震やチリ地震でも要員が派遣されました。

熊本赤十字病院に勤務して約二十七年がたとうとしています。勤務を始めたころは古い病院で、四百八十床の病院に医師が五十名程度しかおらず月二―三回の救急当直がありました。多いときは小児から大人まで百名近くを夕方から翌日朝まで徹夜で診察し、救急車が搬入されればこれにも対応し、翌日も普通に勤務するといった激務をこなしていました。しかし、体制が徐々に整備され救命救急センターに救急部が設置され専属の救急医が救急車搬入の重症患者に対応するようになり、医師の数が増えCTやMRI等の救急検査体制も整ってきています。研修医にも人気のある病院となり救急

医療の現場には多数の研修医の姿がみられます。

現在私は、消化器科に所属しており消化器疾患をかかえる患者様を中心に医療を行っています。吐血や下血などのある救急患者から早期胃癌の内視鏡治療まで診療内容は多岐にわたっています。

へき地医療からは離れましたが、現在私のおかれている立場でどのようにに地域医療に役立つことができるかを考えてみました。まず、自治医科大学の卒業生を受け入れる初期研修病院の医師として、これから地域医療の現場に赴く彼らの教育が大事だと思っています。これには、私が九年間の義務年限の間に経験したことや考えていたことを話すことが役立つと感じています。また、彼らの医療技術のサポートとして自分の専門である内視鏡検査の研修等も行っていきます。また、当院には自治医科大学以外の研修医も多数いるため彼らの教育も重要と考えています。へき地での経験等を話すことにより、少しでも地域医療に興味をもって地域で働きたいと思う医師が増えればいいなと思っています。

次に、日々の診療を着実に行うこ

とが地域医療に役立つと思っています。地域の診療所や病院から連日多数の患者紹介を受けています。それらの患者さんを着実に治療してまた地域の医療機関にお返しすることで地域医療のお手伝いが少しでもできればと考えています。

時々、地域の病院から代診を頼まれることがあります。一人診療所の医師の急病や学会出張等の場合です。このような場合も積極的に代診にでかけるようにしています。

医師不足、特に病院勤務医不足が叫ばれる昨今、病院勤務医を続けることが地域医療に役立つのではないかと考えるようになりました。病院勤務医は拘束時間も長く大変です。少しのミスも許されない重症の患者さんを診ることも多いため、治療経過が思わしくない場合もあります。ときには、クレームが来ることもあります。このようなことで精神的にも肉体的にもまいってしまいがちです。いくつかあると思います。しかし、重症の患者さんや難治性の患者さんの治療がうまくいったときの喜びは何事にも代え難いものがあります。今後、地道に医療を続けていきたいと思います。